
ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだったら〜ライダーワールド〜

【Nコード】

N8328Y

【作者名】

sinnerキヨノリ

【あらすじ】

もしも全てのライダーの世界が一つだったら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とか出ますが気にしないで下さい。

一話「カズマのストレス…鈴木姉弟の恐怖」(前書き)

カズマ「で、新小説始まったけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね」

弟切「・・・」

一話「カズマのストレス…鈴海姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ……。今日も遅刻かあ……」

青年、創立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か……」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい……。はあ……」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが……。
その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うえあっ！」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスムを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかったんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスムとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなっていないのだが、この子供二人。アスムとワタルが昨日色々どんちゃん騒ぎをしていて眠れなかったのである。

「お〜ま〜え〜ら〜」

「まあまあ、怒らなくて良いだろう。実際、二人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしっかりとってある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでてK「剣崎さんとムツキ行かせろ、俺は社会科見学をしてる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマは八つ当たりするように言う。

ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸ってはい
るし、ブレイバックスはもっているが、BOARDの社員では無い
為、ただとぼっちりをくらっているだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この二人の子守は俺がしとくんで、ソウジさ
んはZECT見に行ってください。天道さんが何やらかすか分か
りませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうで
すし、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。ア
ラタさんも加賀美さんと一緒になってやらかしそうですし、行った
方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかったんだ。まあ、あ
っちは天道と弟切に任せるからな。変な事やらかしたらアイツに制
裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の
方ですか？」

ソウジは笑っていった。

「どっちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

所変わってこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフィリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ？今度は」

フィリップは言う。

「何だか、不審者っていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ？」

「うーん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで・・・」

「分かった・・・。剣立カズマだろ。アイツは、最近溜まってるらしいからな」

「今日も、とばっちりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「おいおい、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだろう・・・」

「顔出してるしライダーになれるからって理由でらしい・・・」

「はあ・・・」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

喫茶店兼宿泊場所のマリンチェリアには、鈴海ララとルルが居る。

「で、ソウジさんにストッパー頼まれたの？そのまま」

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、ZECTに行くよ」

「うん」

二人は、ZECTに行く事にした。

＼ZECT＼

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁を下します♪」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。

超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。

ララの使えそうだから生かしておいてという言葉だけで生きれているワームだ。

ララの言葉の力は多大で、ララに逆らうとまずい事があるという噂がある。
なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思ってください☆」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言う、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。

天然Sなのだ。
なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起ころのだろうか・・・？

続く

一話「カズマのストレス…鈴海姉弟の恐怖」(後書き)

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」

ララ「えっと・・・」

ユウスケ⇒ユウスケ君

ワタル⇒ワタル君

シンジ⇒シンジ君

カズマ⇒カズマ君

タクミ⇒タクミ君

ショウイチ⇒ショウイチさん

ソウジ⇒ソウジさん

アスム⇒アスム君

五代⇒五代さん

津上⇒津上さん

真司⇒城戸君

乾巧⇒巧さん

剣崎⇒剣崎さん

ヒビキ⇒ヒビキさん

天道⇒総司君

野上⇒良太郎君

紅渡⇒渡さん

士⇒士君

左翔太郎⇒翔太郎君

フィリップ⇒フィリップ君

映司⇒映司君

弦太朗⇒弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

二話「映司の苦勞：子供達（十ソウジ）の社会科見学（前書き）」

映司「二話で早速僕の身に何が・・・」

カズマ「さあ？」

タクミ「はあ・・・」

アスム「今回は師匠出してくださいよ・・・」

ララ「今回は無理かも・・・」

二話「映司の苦勞：子供達（十ソウジ）の社会科見学」

子供二人と三十路は上機嫌だった。

ずっと気になっていたのだろう。

BOARDの中身が。

「♪♪♪♪♪」

「子供達とはともかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、
なんだか三十路の人がそんなことしていると正直引きます。えーっと、
こっちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびゅっしり
詰まっていたりするので、あまりこの中に人は入れないです」

「アスム！見てください！パソコンが沢山あります！」

「パソコン・・・ですか・・・？」 ↑あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こっちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれない。

「カズマさん！訓練ですか！？少しやらせてください！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいえ、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは・・・と思ったのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ぼ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやってみようか」

という事で、何故か丁度悪いタイミングで帰ってきてしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になってしまった。

「えーっと、じゃあ、かるーく説明します。まず、模擬戦をします」

「「どんだけリアルな訓練なんですか!？」」

アスムと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスム」

「でもやります！」

「えっと、この機械の中に入ってやります。この機械は総て連動してるので、まあ、丁度俺と剣崎さんとアスムとソウジさんで四人だから二対二で出来るね。剣崎さん♪」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

(コイツ絶対それ分かってて引き止めたな・・・！)
思っていた。

ちなみに、チーム分けは
アスム・ソウジ…カズマ・一真
になった。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ・・・ファイツ！」

「……………実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせてもらう」

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジャキ」

＊ちなみに作者は始さんの性格分かってません

『というか、もう戦闘は始まってますよ！』

「おーっと！余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けてきます！が！」

『うええええええええええ！』

『剣崎さん！危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さん、これは一体どういう事でしょうか？」

「……………第三のジョーカー候補だな、アイツ」

「ちゃんと解説してください！」

＊ちなみにこの小説では剣崎さんはジョーカー。相川さんもジョーカーという設定です。

『俺は人間だあああああああああああああああああああ！
！！！！絶対にジョーカーにはならないからなああああああああああああああああ！！！！』

ちなみに、カズマは全力で否定していたが。

『ふ、剣崎、隙あり！』

『うえいうえあ！！！？？』

「おっと！此处で今まで何もしていなかったソウジさんが剣崎さんに特攻してきました！」

『つていうか今の声は何だよ！』

「戦っていても全力で突っ込みをするカズマさん！解説の相川さん、これはそういう事でしょうか？」

「……………突っ込みとしての本能。体にしみこんでいるのか……………」

「何ですかその言い方！？」

『つていうか社会科見学は何処行った!』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました!』

「アスムは少し自重してください!」

「……………(アイツ、本当にジョーカーに出来るな……………)」

ちなみに、カズマは何やかんやで剣崎さん守ってます。

「翔太郎」

「何だ? フィリップ」

フィリップは、相棒の翔太郎に言った。

「映司が、翔太郎に相談したい事があるって」

「……………はあ……………」

「どうしたんだ? 映司」

「ああ……………聞いてくれよ……………」

「あ、ああ……………。まあ、とりあえず座れよ」

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？映司」

「あ、ああ……。実はな……」

映司は一息ついていった。

「アंकが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思うと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会ってフォローして、アंकがアイスアイスうるさくて、挙句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかって……」

「……………。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アंकには、僕たちから言っておくよ」

「うん……頼む……」

続く

二話「映司の苦勞：子供達（十ソウジ）の社会科見学（後書き）」

意外に社会科見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。何かヘマして。それかソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

2011年11月25日21時55分発行